

全体性の回復過程における物語の役割

— 『はてしない物語』におけるバスチアンの再生から—

The Role of Narrative in Restoring Wholeness

— From Bastian's Rebirth in *Die Unendliche Geschichte* —

長岡 由紀子

愛知みずほ大学人間科学部

Yukiko NAGAOKA

Faculty of Human Sciences, Aichi Mizuho College

要旨

心理療法をはじめとした心の援助は、セラピストとクライアントの関係性をもとに取り組みられるが、セラピストはクライアントの話を単なる情報としてではなく、「物語」として理解することが少なくない。そのため、「物語」に関する理解を深めることは心理的援助の専門性において重要な要素となる。その一方で、現代社会はテクノロジーの発展により、対象との「関係の相互性」が希薄になり人間理解が分析的となる傾向がある。しかし、心の問題においては分析的な視点ではなく、その人個人を全体的に見る視点から理解することが肝要となる。すなわち、心においては部分的ではなくその全体性をもって回復する過程が求められるのであり、この過程には因果論ではなく、非因果論的な要素を有する物語が必要とされている。そこで本稿では、非因果論的な物語が模索される途上の作品とみられるミヒャエル・エンデの『はてしない物語』を題材とし、人間の全体性の回復過程における「物語」の役割について検討を行った。検討は全 26 章からなる本作品の第 24 章から第 26 章を対象として行い、全体性の回復には、①時間軸の再構成、②自らを「孤独」な状態にすること、③内面に存在するもう一人の自分の存在に拓かれること、が必要であると考察した。その上で「全体性の回復」には、非因果論的な「つなぐ機能」を内包する、神話としての物語の役割が求められるとした。

キーワード： 物語； 全体性の回復； 神話； 『はてしない物語』

Key Word : narrative; restoring wholeness; myth; *Die Unendliche Geschichte*

I. 問題と目的

1. 心理療法における「物語」

心理療法にはさまざまな学派による方法があるが、程度の違いこそあれ、セラピスト(以下,Th とする)とクライアント(以下,CI とする)の何らかの関係性のもとに心理学的支援は成立している(大山,2021)。そのため,CI の語りは Th には単なる「情報」に留まらず、「物語」として理解されることが少なくない。なぜなら,Th が耳を傾ける CI の言葉が心の深い層に関連するほど、その語りは「物語」の形をとるとされているためである(河合,2001b)。一方、医学の領域においては、ストーリ

ーを実践的に扱う臨床手法をナラティブ・メディスン(narrative medicine : 物語医療学)としているが(Charon, 2006/2011)、医療と心理臨床の領域において「語りを物語として受け取ること」は、本質的には同質のものとして論じられている(岸本,2015)。このように、心理療法および精神療法の領域^{註1)}において,CI の語りを「物語」として理解することは重要なものであり、「物語」に関する理解を深めることは、心の治療における専門性を考える上で不可欠な要素となる。

2. 「事例」として記述される物語

Th と CI の関係性が基盤となる心理療法では,CI の

語りはまず Th の面接記録として言語化される。そしてそれらの記録が事例という形にまとめられ、ケースカンファレンスや事例研究として提示される。そのため、事例は個々の事象がストーリーとしてつなぎ合わされることにより作られる。このような「つなぐ機能」は物語の特徴とされており(河合,2001b)、事例は物語性が内包されたものとして成立する。ただし、この際の「つなぐ機能」は、CI の語りを Th がどのように理解したか、という側面が反映されたものとなるため、あくまでも「Th と CI の関係性により生成された物語」が事例としてまとめられることになる。

そもそも心理学において心理的諸問題を実践的な形で扱う臨床心理学では、対象の個別性に焦点をあてる方法論として事例研究が用いられるようになった。その中で、河合(1962)は、ロールシャッハ法の方法論の検討から臨床心理学に現象学的接近法を導入することの意義を見出し、この過程を経て、「理論の精密さや明確さを誇りとするよりも実際場面に役立つことを第一とする心理学」を模索するようになった。この際に河合が特に注目したのは、現象学的接近法により現象を記述する上で、記述者個人の内的世界、すなわち主観の世界をいかに尊重するかということであり、つまるところ「自分の視野をできるだけ拡大することに努めつつ、自分の主体をその事象に関与させることにより、その主観と客観を通じて認められる一つの布置を、できるだけ適確に把握しようとする」ことが肝要であるとした(河合,1967)。そのため、このような方法論は、対象を主体と切り離してとらえる自然科学的方法論、すなわち、事象を「原因—結果」という因果論でとらえる方法論では不十分であることが示唆された。これらの背景には、ユング(C.G.Jung)の分析心理学^{註2)}の考えがあり、心の現象を共時的に把握することの有用性に依っている。また、山中(2009)は事例の記述は「個性記述的方法論」で記述されるものであり、因果論ではなく「縁起律」に基づくものであると述べている。尚、この「縁起律」とは、「時空を貫いて、意味を同じくする現象が、同時に、とくにクロノスのみならずカイロスを共にしてコンステレート(布置)されることを説明する原理」とされたものである(山中,1996)。

このように、「事例」として記述される物語は、文章としては一つの筋をとるが、その作成過程において、記述者自身の輻輳する内的体験が、いかなる内的作業により記述されているか、ということが事例の普遍性の質に影響することになる。

3. 「臨床の知」としての事例研究の普遍性

以上述べてきたように、事例の記述は記述者自身が自らの体験を言葉にするものであるが、その一方で、第三者が事例からなにがしかの学びを得ようとする場合、

事例を聴く者自身の体験に負うことになる。すなわち、これは「間主観的普遍性」(河合,2001a)とされるもので、発表された事例を聴く者が、事例を聴く中で自身の内に喚起された何ものか(これは直接的には表現することができない X とみなされている)それ自体を、普遍性の要素とみる概念である。たとえば、不登校の子どもをもつ母親の面接事例を聴く中で、病院で担当している(不登校とは全く関連のない)患者についての洞察が深まる、ということである。言い換えれば、対象者の年代や主訴など多様な現実的要因が異なった事例でも、心の本質という深層においては、共通した知見が見い出されるということである。このような「個より至る普遍性」は、事例を記述する時と同様に、事例を聴く者の体験的要素が大きく影響するようになる。このような、「体験」が知の要因となる考えは、中村(1992)による「臨床の知」の概念に由来する。

「臨床の知」は、近代科学の普遍性を成す要因である、普遍性、論理性、客観性に対するものとして、コスモロジー(固有世界)、シンボリズム(事物の多義性)、パフォーマンス(身体性をそなえた行為)の概念を提唱したものである。すなわち、前者は事象を単線的な因果関係でとらえるための視点であり、対象と主体を分離することを前としている。一方、後者は「個々の場所や時間のなかで、対象の多義性を十分に考慮に入れながら、それとの交流のなかで事象を捉える」ための方法とされており、「経験」が大きな役割となることが示唆されている。

4. 全体性の喪失

このような「臨床の知」が提唱されることとなった背景には、近代科学がテクノロジーの発展により、「生命現象」そのものや、対象との「関係の相互性」が軽視されるようになり、リアリティのあり方が疑問視されるようになったことがあげられる(中村,1992)。これを河合(2005)は「全体性の喪失」とし、現代人の負うべき重要な問題であると述べる。すなわち、元来、人間は細分化して理解される存在ではないが、テクノロジーの発展により、部分的に恩恵を享受する形で、時流への適応を繰り返してきた。しかし、ひとたび心理的に大きな衝撃を受ける事態が起きた時、その細分化された方法論では、解決の手がかりを得ることができない実情がある。なぜなら心的ダメージが生じる際に体験されることはあくまでも「きっかけ」であり、必ずしもそれが「原因」とはならないからである。だからこそ、そのダメージは個々で異なり、その回復の過程も一樣にはならない。そのため、真の回復には、「その人の存在を深みから変えるためには、身体的にも精神的にも相当な組みかえが必要」(河合,1986)となる。この「全体性の喪失」の問題は、デジタル世界とアナログ世界が大きく乖離しつつある現代において、看過されない問題である。

5. 「全体性の回復」に向けた「物語」の存在意義

以上のような「全体性の喪失」に対して「全体性の回復」が目指されることになるが、河合(2005)は、全体性の回復のためには「つなぐ」力が必要となり、「物語」が重要な意味を持つことを示した。ここで重要視されるのは、物語は語られるものであるため、語る者とそれを聴くものとの「関係」により生み出される力がある、ということである。また、物語が有するつなぐ力の観点から言えば、物語の存在が、テクノロジーの発展で分割的となった人間の心と身体をつなぐ力を、再生させることになる、ということである。後者については、本来、人間の心と身体が不可分の存在であったものが、「分離」されたことを示す症例として心身症があり、その発生の背景には「意味」がある(山中,1988)。さらに、この治療過程では「物語」が生まれるともされている(河合,2005)しかしながら、治療過程で生まれる物語は、「非合理的で、矛盾に満ち、注意深い関心をそっと向け続けることなしには聴きとることができない繊細なもの」である(斎藤,2001)。すなわち、「全体性の回復」に寄与する物語は、因果論的な範疇を超えた物語となる可能性が高くなる。

6. 非因果論的な物語を模索したミヒャエル・エンデ

この因果論的な範疇を超えた物語を追及した作家として、ミヒャエル・エンデ(Michael Ende: 1929-1995)があげられる。ドイツの作家であるエンデは、青年期より小説、詩、絵本など、多彩なジャンルにわたり創作活動を行ってきた(安達,1988)。小説としては、1960年に *Jim Knopf und Lukas der Lokomotivführer* (『ジム・ボタンの機関車大冒険』)を公表した後、*Jim Knopf und die wilde 13* (『ジム・ボタンと13人の海賊』)、*Momo* (『モモ』)の作品を経て、1979年に *Die Unendliche Geschichte* (『はてしない物語』)を出版することとなった(堀内,2015)。しかし、この過程においてエンデは、「夢幻的な文学に類するものを書く可能性」を追求するようになり、「『絵』の世界」を求めようになる。なぜなら、エンデにとって「絵」は、「音楽的な観点」から生まれた「それだけで内なる調和を持つ」存在であり、因果論の論理による「ものがたりの論理」に倣わない、まったく異なる観点からの創作をもたらすものであったためである。このような観点によるエンデの模索は、1984年の *Der Spiegel im Spiegel, ein Labyrinth mit Zeichnungen von Edgar Ende* (『鏡の中の鏡—迷宮—』)で結実することになるが(田村,2000/2009)筆者にはここに至るまでの作品において、エンデの物語創作における、因果論から非因果論への世界観の変遷を見ることが出来るのではないかと考えた。『鏡の中の鏡—迷宮—』以前の小説の作品となる『はてしない物語』は、ファンタージェンという物語世界そのものがモチ

ーフにされた作品であり、いわゆる「再生の物語」である。すなわち、「全体性の喪失」に陥った主人公の「全体性の回復」への物語ととらえることもできる。そのため、本作品を検討することは、先述した「全体性の回復」がいかになされるのか、ということを検討することと等価ではないかと考えられた。

そこで本稿では、『はてしない物語』(Ende, 1979/1982)を題材とし、人間の全体性の回復過程における「物語」の役割に関する論考を提示することを目的とする。

II. 『はてしない物語』の検討の視点

1. 『はてしない物語』の概略

エンデによると『はてしない物語』の着想は、「少年が読書中に物語の中に入り込んでしまい、そこから出てくるのが難しくなる」という自身のメモからであった(田村,2000/2009)。そこから、少年を主人公とした心の成長プロセスが描かれる。本作品の執筆は3年もの年月にわたり500ページに及ぶもの(邦訳版では600ページ)となったが、それは、実際に書かれた総原稿量のわずか5分の1であった(Eppler, et al., 1982/1984)。

物語は前半部と後半部に分かれている。前半部では、バスチアン少年が『はてしない物語』という本を読む、という立場で登場し、その読み始めた物語は「ファンタージェンという世界が崩壊し始めている」というものであった。ファンタージェンは、動物、小人、妖怪、鬼、植物、魔法のほか、人間以外の生命をもつあらゆるものが住む世界であり、「幼ごころの君」と呼ばれる女王が統治していた。この世界が、「虚無」という正体不明の存在に脅かされるようになっていたのである。そこで、本(物語)の中ではアトレユという少年が、ファンタージェンを救う方法を探す旅に出ることになり、その任を遂げるところまでが前半部の内容である。

この前半部の最後にバスチアンは、ファンタージェンに行くことになる(すなわち、本(物語)の中に入る)。そして、すべてが無くなり「無」となったファンタージェンをバスチアンが再生させていくところから後半部が始まる。この「再生」とは、バスチアンが望んだものを幼ごころの君が叶えていく、というものであった。つまり、バスチアンが望んだ景色や生き物などありとあらゆるものが現れ、ファンタージェンが新たに創造されていくことになる。そのため、バスチアンはいわゆる「世界の創造主」としての存在となる。もともとバスチアンは現実世界では、小さくて気の弱い太っちょのいじめられっ子だったが、ファンタージェンでは次第に凛とした姿に変貌し、周囲のものたちからは「創造主として羨望的」となった。このような過程の中でバスチアンは次第に独善的となり、現実の世界に戻らなくて

も構わないと思うようになり、現実世界での自分の記憶を少しずつ失っていった。一方で、このバスチアの独善性がファンタージェンを「破壊」へと導くことにもなり、アトレユをはじめとしたファンタージェンの仲間たちはバスチアから離れていき、バスチアは独りとなった。そしてついにはバスチアに残されたものは自分の名前のみ、という状態にまでなるが、その名前すらもとうとう思い出せなくなる。しかも自分の名前は唯一現実の世界へ戻る鍵であった。バスチアは窮地に立たされたが、最終的にはアトレユの助けのもとで、現実の世界に戻ることであった^{註3)}。

2. 神話としての『はてしない物語』

バスチアのファンタージェンから現実の世界への帰還について、エンデは「バスチアがかれ自身の神話を見出し、それを体験したからこそ、外の世界の問題に取り組む力を見つけた」と述べている。さらに「(バスチアは)なにものも意味を持たない、外の世界から、すべてに意味があるファンタージェンへやってくる。(ここでは)どのような些細なことも、全部が意味以外のなものでもない。これらの意味をすべて持ってバスチアは外の世界へ戻ることができ、かれの人生の外的な事実の意味を与えることができた。これが神話の機能である」と述べている。そして俯瞰した視点から、「神話は人間の生の矛盾を、ひとつの物語やひとつの絵にまとめる」「個々の人間が完全に成長すれば、各自自分の神話を持つ」とし、人間にとっての神話の必要性を説いている(田村,2000/2009)。

バスチアの場合は、もともとの現実の世界では、母親を失い、父親との関係が希薄であり、学校ではいじめられるという「物語」を生きていた。しかしこれらの「物語」はどれもバスチアが望んだものではなかったのではないかと想像される。そのため、バスチアは現実世界にいながらも、その現実世界を本来的には「生きている」とは言えない状態であったといえるだろう。そのようなバスチアがひとたびファンタージェンに来ると「望みを持つこと」が求められるようになり、その望みを幼ごころの君が叶えるという体験をするようになる。すなわち、先のエンデの言葉を用いるならば、バスチアはこうして自分の「物語」を主体的に生きるようになったのである。しかし、エンデの述べる「成長」に至る前に自分自身の名前を失うほどの危機的状態に陥る。これはまさに河合(1986)の述べる「その人の存在を深みから変えるためには、身体的にも精神的にも相当な組みかえが必要」な状態に見舞われたものとみることができ、次節では、物語の後半部の終盤(全 26 章内の 24~26 章)でこのバスチアの「相当な組み換え」が果たされることになった要因について検討する。

III. 『はてしない物語』の検討

1. アイウオーラおばさま(『はてしない物語』第 24 章)

仲間から離れて独りになったバスチアは、「変わる家」に到着する。そこではアイウオーラおばさまという花や実をたくさんつけた帽子をかぶった女性が、100年もの間バスチアが来るのを「待っていました、よくここまでできましたね」と迎える。おばさまはバスチアのことを「わたしのかわいいぼうや」と呼び、バスチアも亡くなった自分の母親を思い出すことになり、しばらくふたりは共にその家で過ごすことになる。その間、バスチアは果物を食べ続け、優しく温かなおばさまのおもてなしに心ゆくまで、ときには幼子のように身を任せる。それは、身も心も飢餓状態であったものが、満たされていく体験となった。そして、バスチアはファンタージェンに来てからのことをおばさまに話すようになり、自身のいたらなさにも目が向くようになり、自省の言葉を口にする。しかし、おばさまは「でもそれがあなたの道」「そこ(生命の水の湧き出る泉)へ通じる道なら、どれも、結局は正しい道だったのよ」と言い、バスチアは胸の中のわだかまりが溶けていくように泣き出した。そしてついに、バスチアは自分の「真の意志」^{註4)}を見つけ、それを叶えるためにおばさまの家をあとにした。

アイウオーラおばさまは、あふれんばかりの母性をバスチアに与えた。自分を見失った少年にとって、このような、何の制約もない、自由で守られた家で過ごす時間は、自らの自然性が回復する契機となっただろう。この「100年待つ」というイメージは夏目漱石の『夢十夜』の第一夜にもみられる。アイウオーラおばさまの場合とは状況も内容も異なるが、共通するのは、待つ側の人間にとっては、「長いけど長くはない」という感覚であろう^{註5)}。そしてこのクロノス的な時間軸とは異なる次元に待っている側の人間が存在していることが、待たれる側の人間に真の救いをもたらすことになるのではないだろうか。クロノス的な時間、すなわちいわゆる通常の「時計時間」は現実生活を常識的に送ることができる人が対象とされた時間ではないかと理解される。おばさまのもとにたどり着いた時のバスチアはすでにクロノス的な時間軸から逸脱しており、おばさまのような存在と関わることで、バスチアは自らの時間軸の再構成を果たしたのではないだろうか。

2. 絵の採掘坑(『はてしない物語』第 25 章)

アイウオーラおばさまの家をあとにしたバスチアが次に出会ったのは、ヨルという盲目の老人だった。ヨルは雪原にある絵の採掘坑で働くただ一人の坑夫である。ヨルが掘っている「絵」とは、雲母でできた薄い透明

の板状の「人間世界の忘れられた夢」であり、それらはファンタージェンの地下に積み重なっているという。ファンタージェンという世界はこの「忘れられた夢」の基盤に存在していることがここで明らかとなる。ここでバスチアンは、「自分の絵」なるものを見つけなければならなくなる。それこそが、現実の世界に戻るために、唯一必要なものであったためである。バスチアンは来る日も来る日もヨルと共に、地下の採掘坑へ降り、暗闇の中で掘り続けた。狭い採掘坑では、「母親の胎内に宿る胎児のように」丸くなりながら作業を行い、雲母の薄い絵はわずかな物音でも壊れてしまうため、静寂に満ちた世界にバスチアンは身を置き続けた。そして、どれほどの月日が流れたかのかさえわからなくなった頃にその瞬間は訪れた。絵を見つけたのである。バスチアンの心は、氷の層に閉じ込められたように見えるある男性の絵に揺り動かされた。その男性に思慕を感じながらも、それが誰なのかわからず、そして、この時に自分の名前を忘れる。これでバスチアンは、現実世界の記憶をすべて失うこととなった。しかしその一方で、氷に閉じ込められた男性の声をバスチアンは心の奥深くで聞く。「助けてくれ！わたしを見捨てないでくれ！一人ではこの氷から出られない。わたしをここから救い出せるのはきみだけなんだ！」。バスチアンは現実世界に戻るために、生命の泉が湧き出る泉を求めて歩き始めた。

この絵の男性が誰であるかは本章では明示されていないが(バスチアンが現実世界のすべての記憶を失ったため、物語的にも明示できない)、暗にバスチアンの父親であることは理解できる(Hocke et al., 2009/2012)。バスチアンの父は妻(バスチアンの母親)を亡くした悲しみと向き合うことができないまま、まさに氷の中に閉じこもったような状態であった。そのため現実世界でのバスチアンとの関わりも、距離が置かれたものになっていた。アイウオーラおばさまのもとで過ごしたバスチアンは、「愛すること」を求めるようになる。そしてそのことを可能とする生命の水を欲するようになる。実際に、そのようなバスチアンにアイウオーラおばさまは、「生命の水を飲んだらその水をほかの人に持って帰りたくなる」と話していた。このときすでにバスチアンには父親と母親の記憶はなくなっていたが、絵の採掘坑で父親を彷彿とさせる絵が見つかったことで、バスチアンの潜在意識において父親を強く求めていることが推測されるようになる。

自分の名前以外の記憶を失ったバスチアンには、他に「つながる」要素はなくなる。先に、「つなぐ機能」が物語の象徴であると述べたが(河合, 2001b)、ここにきてバスチアンが自分の名前以外の記憶を失ったということは、この物語自体が意識水準では成立しない状況になったということである。言い換えるなら、バスチア

ンの意識水準にある事柄をつなげて物語を作ることができなくなった、ということである。そこで登場したが、「絵」のモチーフとなるが、エンデにとって「絵」は、「それだけで内なる調和を持つ」存在であり、因果論の論理による「ものがたりの論理」に倣わないものである(田村, 2000/2009)。そのため、バスチアンが採掘坑で「自分の絵」なるものを掘り出したということは、心的現象としては、内なる深奥に存在するものとの邂逅であり、掘り出すと同時に、自らを同定する「名前」を失ったのは、至極当然のことのようにも思われる。

なぜなら、「名前」の本質が組み込まれた物語にアーシュラ・K.ル＝グウィン『ゲド戦記』(Le Guin, 1968/1976)があるが、ここで「真の名を知ることは、そのもの自体を知ることである」とされるように、「名前」は物事の核となる部分を司っている。そのため、ここでバスチアンは自分の名前をも失い、精神的な深淵に至ることで、ファンタージェンと現実の世界の境界を超えるための、透過しうる存在として「無」に帰する必要があったのかもしれない。ただし、本来的に「名前」は有限の時間軸に存在するものである(長岡, 2021)。現実につながるこのような名前の特性があつてのことであることは言うまでもない。いずれにしても、因果論に依らず、「絵」という「それだけで内なる調和を持つ」存在が、バスチアンを自らの「再生」に向けた孤独な状態へ牽引することになったのではないだろうか。

3. アトレューユ(『はてしない物語』第26章)

とうとうバスチアンは生命の水の湧き出る泉にたどり着く。そこにはアトレューユとフッフール^{註6)}がいた。アトレューユはバスチアンをファンタージェンに誘うきっかけをもたらした少年であったが、バスチアンがファンタージェンに来て以来、次第にふたりは仲たがいをするようになった。アトレューユは独善的になったバスチアンが現実世界の記憶を失くしていくのに気づくようになり、バスチアンを諷めるようになったが、そのことがバスチアンには疎ましく思われるようになったためである。しかし、生命の泉を前にした彼らには、もはやそのわだかまりはなかった。そして泉を前にして立つ彼らに、泉の水から名前が訊ねられた。しかし、すでに自分の名前を忘れてしまっていたバスチアンは答えることができない。そこでアトレューユが代わりにバスチアンの名を言うが、泉の水は記憶の無い者は認めないという。アトレューユは続ける。「かれにかわってぼくがみんな覚えています。かれ自身のこととかれの世界のことも、(かれが)ぼくにはなしたことを(ぼくは)みんな覚えています」泉の水は迷った末に、認めることにし、バスチアンは泉へ歩を進めた。するとバスチアンがファンタージェンで得たすべてのものがその身から無くなっていき(容姿ももとの太っちょの少年に戻る)、瞬間的

に現実とファンタージェンの両方の世界のすべての記憶を無くした全くよりどころのない状態となった。それでもバスチアンはためらわずに泉に飛び込んだ。バスチアンは身も心も泉の水を受け、生きる喜びを余すところなく享受する。そして、何千何万とある喜びにおける本当の喜びが何であるのかを全身全霊で知ることになる。

あとになって、バスチアンがまた自分の世界にもどってからずっと時がたち、やがて年老いてからも、この喜びはもう消え去ってしまうことはなかった。生涯のうちの最も困難な時期にさえ、かれにはこの心の喜びがあり、それがかれをほほえませ、まわりの人びとを慰めた。—『はてしない物語』 p572

しかし、ここにきてバスチアンが現実の世界に戻るための門が開かないという事態になる。泉の水がバスチアンに訊ねる。「ファンタージェンではじめた物語を、みんな終わりにしてきたか」と。これまでバスチアンは一度「無」になったファンタージェンを創造するために、多くの「望み」を語ってきた。ここで問われた「物語」とはそのことであった。しかし、実際には、バスチアンは自分の望みを語るままにしてあり、それにより生じた物事には全く注力してこなかった。そのため、泉の水はバスチアンにもう一度ファンタージェンに戻り、バスチアンが始めた物語すべてに結末をつけなければならないと言う。バスチアンは絶望的になった。そのときアトレーユが、それは自分が引き受けると申し出、認められることになった。そして、バスチアンは現実の世界へ戻ることとなった。

アトレーユは前半部の冒険の中で、自分の本当の姿を見せるという鏡の門で、バスチアンの姿を見る。しかし、本作品では物理的にアトレーユとバスチアンは別の人間として描かれているため、アトレーユとバスチアンが同一人物、ということにはならない。そのため、ここではアトレーユの内面において、もう一人の自分の存在としてバスチアンがいると理解する方が賢明であろう。そのバスチアンが作り出した物語全ての結末をつけることをアトレーユは覚悟する。アトレーユという名前には「みなの子」という意味がある。すなわち、幼い時に両親を亡くし兄弟もいない少年が、部族の人たちに育てられる中でつけられた名前である。つまり、アトレーユは孤児であった。小説作品として本作の前作にあたるエンデの作品に『モモ』(Ende, 1973/1976)があるが、この主人公のモモという少女も孤児であった。モモは純粋さゆえに人の話を先入観なく聴くことのできる少女として描かれているが、このような意味において『モモ』は、物語の生まれる根源が何であるの

かというのが描かれた作品であるようにも理解される。そして『はてしない物語』では、物語がどのように始まり、どのように終わるのか、ということが描かれた作品であるようにもとらえられる。なぜなら、本作品にはファンタージェンという一つの世界の輪郭が描かれているからである。ここではまず、非現実的なファンタージェンという世界に対して、人間の世界という対立する世界が置かれていることで、ファンタージェンという世界との「境界」が示されている。そして、本文で描かれる登場人物たちのその後の話に発展しそうなところで、エンデは「けれどもこれは別の物語、いつかまた、別のときにはなすことにしよう」と止めている^{註7)}。このように、物語の創造には作り手の意志の関与が必須となる。この意味において、バスチアンが新しいファンタージェンの物語を作る役目を担い、それにより生まれる事柄を収める役目をアトレーユが担うことになったとみることができる。そして、孤児であるということは、本来的にまとう物語の次元がひとつ少ない(つまり、孤児でなく原家族を有する場合、原家族との物語をまずまとうことになり、孤児よりまとう物語が次元多くなる)。それゆえに、モモと同様に「物語を引き受ける力」が大きくなるのではないかと考えられる。言い換えれば、原家族により作られる自分というフィルターがないため、その分、自身を透過する物語が多くなるのではないだろうか。

バスチアンが作り出した物語の結末をアトレーユが引き受ける背景をこのように考えると、物語の受け手となる者の存在の大切さを理解することができるようになる。そして、アトレーユにとってのバスチアンがそうであったように、バスチアンにとってもアトレーユは自分の内面に存在するもう一人の自分であったのだろう^{註8)}。このような自分の存在に拓かれることが、新たな「再生」への道をもたらすことになるのではないだろうか。

IV. 「全体性の回復」における物語の役割

以上のように、すべてを喪失したバスチアンが全体性を回復し、現実世界に戻るようになった過程を検討すると、①時間軸の再構成、②自らを「孤独」な状態にすること、③内面に存在するもう一人の自分の存在に拓かれること、が必要になることが考察された。これらの要因は「自分」という人間を創り直す一連の過程を形成することになり、「その人の存在を深みから変えるために必要となる身体的・精神的な相当の組みかえ」(河合, 1986)に値するものにもなるだろう。だからこそこの過程において、エンデの述べる「人生の外的な事実の意味を与える」(田村, 2000/2009)という神話の機能が働くことになるのではないだろうか。神話学者のケレーニ

イ(K.Kerényi)は、神話は動的、具象的であり、聴覚による対象への感情移入を認めるものであるとしている(Jung et al., 1951/1975)。このように神話は体験的であるだけでなく根源的な次元に通底する要素を含んでいる。すなわち垂直方向へのつなぎの役割を認めることができる。従来言われてきた物語の「つなぎ機能」(河合, 2005)は事象と事象、すなわち同水準にある物事をつなぐことが主流であった。それゆえに作られる物語は、因果論的、または一義的なものとなっていた。しかし、物事の根源に通底する神話だからこそ、非因果論的な「つなぎ機能」を内包し、それゆえに全体性を回復させる推進力を生み出すのではないだろうか。

エンデが「バスチアンがかれ自身の神話を見出し、それを体験したからこそ、外の世界の問題に取り組む力を見つけた」(田村, 2000/2009)と述べたことはすでに示したが、ファンタージェンを新たに創造するためにバスチアンが口にした「望み」は、その折々に出てきたものである。この非因果論的に現出したものに、バスチアンは創造主として意味を自らに見出すことになった。これはすなわち、自らの根源に通底するものとの非因果論的なつながりを見い出そうとした行為であるとも考えられる。このように、「全体性の回復」には非因果論的な「つなぎ機能」を内包する、神話としての物語の役割が必要となるのだろう。

註

- 1)以降は、心理療法と精神療法は、心の治療という点において同様のものとしてとらえ、心理療法という言葉で統一する。
- 2)これまでユングの心理学は「分析心理学」と訳されてきたが、山中(2022)はユングの心理学の本質は、「分析」ではなく「総合」であるとし、「分析心理学」ではなく、「総合心理学」と明示している。
- 3)エンデ自身が、自分が作り出したファンタージェンの世界からバスチアンがどのように現実の世界に戻るのかを探し求めることとなった。これらの創作活動はエンデにとっては「命がけ」のものとなり、「私を危うく精神病院に送り込むところでした」と述べている(樋口, 1986)。
- 4)第15章で「汝の欲することをなせ」の意味を訊ねたバスチアンに、それはしたいことは何でもしていい、という意味ではなく、「真の意志をもて」ということであると、砂漠に生きる孤独なライオンのグラオーグラマーンが言った言葉。
- 5)『夢十夜』では、女を待つ男の「百年はもう来ていたんだな」と「この時初めて気が付いた」様子が描かれている。アイウオーラおばさまでは、それまでの100年について「新しく、それでいて大昔のできごと」と述べている。

- 6)アトレーユの忠実な友の白い竜のこと。
- 7)本作品中にこのくだりは、10カ所あり、このことから本作品が内包するイメージの豊かさを図ることができる。
- 8)ユング心理学においては、「影」の概念で説明される。

引用文献

- 安達達夫(1988) ミヒャエル・エンデ. 講談社現代新書, 東京.
- Charon, R. (2006) Narrative Medicine : Honoring the Stories of Illness. Oxford University Press. (斎藤清二, 岸本寛史, 宮田靖志他訳(2011)ナラティブ・メディスン : 物語能力が医療を変える. 医学書院, 東京.)
- Ende, M. (1973) Momo, oder Die seltsame Geschichte von den Zeit-Dieben und von dem Kind, das den Menschen die gestohlene Zeit zurückbrachte. Thienemann Stuttgart. (大島かおり訳(1976)モモ. 岩波書店, 東京.)
- Ende, M. (1979) Die Unendliche Geschichte. Thienemann Stuttgart. (上田真而子, 佐藤真理子訳(1982)はてしない物語. 岩波書店, 東京.)
- Eppler, E. Ende, M. Tächl, H. (1982) Phantasie/ Kultur/ Politik, Protokoll eines Gesprächs mit Erhard Eppler und Hanne Tächl, mit einer Vorbemerkung von Roman Hocke. Thienemann Stuttgart. (丘沢静也訳(1984)オリブの森で語りあう. 岩波書店, 東京.)
- 樋口純明(1986) ミヒャエル・エンデ : ファンタジー神話と現代. 人智学出版社, 東京.
- 堀内美江 (2015) ミヒャエル・エンデ作品リスト. ユリイカ, 12月号, 218-223.
- Jung, C.G. Kerényi, K. (1951) Einführung in das wesen der Mythologie : Das Göttliche Kind/Das Göttliche mädchen, Rhein-Verlag AG. Zürich. (杉浦忠夫訳(1975)神話学入門. 晶文全書, 東京.)
- 河合隼雄 (1962) 現象学的接近法について : ロールシャッハ法における方法論の問題. ロールシャッハ研究, 5, 150-161.
- 河合隼雄 (1967) ユング心理学入門. 培風館, 東京.
- 河合隼雄 (1986) 心理療法論考. 新曜社, 東京.
- 河合隼雄 (2001a) 事例研究の意義. 臨床心理学, 1(1), 4-9.
- 河合隼雄 (2001b) 「物語る」ことの意義. 心理療法と物語(講座 心理療法 2). 河合隼雄(総編著). 3-19. 岩波書店, 東京.
- 河合隼雄 (2005) 物語の知・臨床の知 : 夢の物語. 臨床心理学, 5(4), 547-552.
- 岸本寛史 (2015) 緩和ケアという物語 : 正しい説明

という暴力.創元社,大阪.

Le Guin, A.K. (1968) *A Wizard of Earthsea*. Parnassus Press, Berkeley, California.(清水真砂子訳(1976)影との戦い(ゲド戦記,1).岩波書店,東京.)

長岡由紀子 (2021) 「名前」の生きる二つの世界 : 『はてしない物語』とゲド戦記『こわれた指輪』の女王たちの物語から.ヘルメス心理療法研究,26,121-127.

中村雄二郎 (1992) 臨床の知とは何か.岩波新書,東京.

大山泰宏 (2021) “心理学的支援とは何か”.心理学的支援法(公認心理師の基礎を实践 15).大山泰宏編著.11-18.遠見書房,東京.

Roman and Patrick Hocke (2009) Michael Ende: *Die Unendliche Geschichte das Phantásien-Lexikon*. Thienemann Verlag, Stuttgart.(丘沢静也,荻原耕平訳(2012)「はてしない物語」事典 : ミヒャエル・エンデのファンタージェン.岩波書店,東京.)

斎藤清二(2001)心身症と物語.精神療法,27(1),15-22.

田村都志夫 (2000/2009)ものがたりの余白 エンデが最後に話したこと.岩波書店(岩波現代文庫),東京.

山中康裕 (1988) “心身症とは何か”.子どもの心身症.山中康裕(編著).3-32.東山書房,京都市.

山中康裕 (1996) 臨床ユング心理学入門.PHP 新書 (PHP 研究所),東京.

山中康裕 (2009) 深奥なる心理臨床のために 事例検討とスーパーヴィジョン.遠見書房,東京.

山中康裕 (2022) ユング総合心理学・精神医学の幕開け.精神療法,48(3),7-10.